趣味の世界も「継続は力なり」？

飄々

広報委員

吉川　功一

広報委員の duty である飄々の原稿、また私の順番が回ってきました。相も変わらずビートルズですが、これだけ１つのことに徹底して打ち込んでいると、全く想像もしていなかった思わぬ出来事が起こることもあるようで、なかなか非日常的な体験をしたのでお話しさせていただきます。

そもそも私がビートルズを好きになったのは中学生時代で、洋楽好きの姉の影響が大きかったように思います。当初は姉の友達にダビングしてもらったカセットテープなんかを聴いていましたが、高校時代の 1987 年にビートルズのアルバムが一斉に CD 化され、お小遣いを注ぎ込んでそれを買い集め始めたのが本格的にハマるきっかけになりました。すべてのアルバム CD が揃い、公式曲 213 曲をすべて耳にタコができるくらい聴き込んだ 1989 年ごろに、今度はタイミング良く未発表曲・未発表テイク満載の名作ブートレッグ「Ultra Rare Trax」が出現、さらにほぼ時を同じくして、ビートルズ研究家マーク・ルーイソンの名著『ビートルズ / コンプリート・レコーディング・セッション』が発売されました。これに刺激を受け、ビートルズ音源マニア（鉄道ファンと同じでビートルズマニアにもいろんな流派があります）の道に没入、公式盤以外の幾多のブートレッグ（CD/VHS）や、逆行してレコードなども集めまくり、大学生のころには、ビートルズ好きの友人も姉もすっかりドン引きするレベルのビートルズマニアとなっていました。大学５年生の時にはバックパックを背負った貧乏旅行でしたが、念願のロンドン / リバプールにも出かけています。

その後、1996 年に医師として働き始めてからは趣味に没頭する時間なんてすっかりなくなってしまいましたが、それでも細々と情報やアイテム収集は続けていました。2005 年には脳腫瘍の基礎研究で海外留学する機会に恵まれ、行き先として複数の候補の中から選んだ先はジョン・レノンが初めてのソロライブを行った Varsity Stadium のあるトロント大学だったりと、いつも何かしらビートルズの影響を受けていたように思います。しかし、あまりにハマりすぎるのも考えもので、ファン同士の会話でも通常レベルの話では満足できなくなってきます。ビートルズが好きだと言うとかなりの確率で「わたしもビートルズ好きなんです！」という返事が返ってきますが、そういった方と嬉々としてお話していても徐々に相手は「さすがにあなたにはついて行けない・・・」という雰囲気になりドン引きされておわり、という悲しい日々を過ごしていました（笑）。まあ山口の片田舎で住んでいるので仕方ないとは思っていましたが、ネットの普及と共に状況が変わり始めます。

2000 年代にネット上で個人ブログが盛んとなると、顔こそ見えないもののビートルズマニアのちょっとしたコミュニティが生まれて情報交換できるようになってきました。その後、決定的に状況が変わったのが、2000 年代後半から急速に発達してきた SNS の出現です。私も 2013 年ごろに SNS を始め、当初はビートルズとはなんら関係のない知人同士でやり取りする程度でしたが、その後ビートルズネタを発信し始めると、徐々に全国に無数にいるビートルズファンとのつながりができはじめました。もちろん初心者的な

ファンの方もいらっしゃいますが、徐々に話の合うコアなファンとのつながりが強くなっていき、いままで話しても誰も相手してくれなかったようなマニアックな話題で盛り上がれるようなコミュニティができはじめます。そうこうするうちにブログ時代に匿名でやり取りしていた方に偶然出会ったり、コレクター同士のつながりができたり、いままでは会報を読むだけの一方通行な利用だけだったファンクラブの創設者と知り合いになったりと、さらにディープでマニアックなコミュニティが形成されていきます。さらに、そういう方を通じて音楽雑誌関係者と知り合いになり、雑誌や書籍掲載用に資料提供させていただいたりもするようになりました。そんななかで私の提供した資料を基に１冊の本ができたりもしました（それが令和４年11月号の「飄々」(750～752頁)でご紹介した本『ビートルズ・ファン・クラブ大全』です)。そのうちにSNS上だけでのつきあいではなくなり、ときどき東京であつまってオフ会（＝単なる飲み会）を開いて交流するようにもなってきました。そんななかで、その名を知らないとビートルズファンとしてはモグリだと言われるほど現在の日本ビートルズ界では有名人の藤本国彦さん（元CDジャーナル編集長）とも親しくさせていただくようになりました。ちなみに私の自宅はレコードをはじめあらゆるビートルズアイテムを集めた“秘密基地”の様相を呈しているのですが（令和３年７月号の「飄々」(490～491頁)でちらっと紹介しています)、藤本さんを含めコアなマニアの皆さんが泊まりがけで“秘密基地”に遊びに来られたりと、一昔前ひとりで寂しくチミチミと趣味活動していたころから考えると、全く想像できないくらいの充実した趣味活動環境が実現しています。すべてはSNSのおかげです、恐るべし･･･

そんななか、昨年わが家にとって驚くべき出来事が起こりました。なんと藤本さんの紹介で高嶋弘之さんがわが家に遊びに来られたのです。高嶋弘之さんといえば、バイオリニストの高嶋ちさ子さんのお父様で、元東芝音楽工業所属の初代ビートルズプロデューサーです。「抱きしめたい」「ノルウェーの森」などの邦題を作られた事でも有名で、ビートルズファンからみるとちょっと雲の上の人のような存在なのですが、なんとその高嶋さんがとうとうわが家にやって来たのです（ヤァ！ヤァ！ヤァ！）。高嶋さんは御年89歳ですが、今でも女性音楽グループ「1966カルテット」をプロデュースされるなど、現役バリバリで仕事をされており、驚くほどパワーに溢れる方でした（ちさ子さんと一緒によく番組出演もされているので、ご覧になった方も多いでしょう)。そんな高嶋さんにわが“秘密基地”を褒めていただき、それはそれはマニア冥利につきる一日なのでした。

そんな驚くべき出来事があった2023年でしたが、さらに驚くべき出来事が続きます。ご存じの方も多いと思いますが、昨年11月２日にビートルズの新曲が発売されました。その新曲発売にあわせて日本テレビの番組『世界一受けたい授業』でビートルズ特集が組まれることになりました。その番組製作についての相談がまず高嶋さんにあったそうで、高嶋さんを通じて藤本国彦さんが講師として出演することが決まりました。そのやり取りの中で、高嶋さんから私の話が出たそうで、私が番組で資料提供などのお手伝いをすることになりました。私は資料提供するだけなので、当初は「藤本さん頑張ってくださいね～」とか呑気に応援しながらお手伝いしていただけだったのですが、徐々に話が膨らんできて最終的に私までスタジオに駆り出されることに・・・

出演依頼を受けたときは「え？だれが？わたしが？なんで？ほんとう？」とキツネにつままれたような気分でした。『世界一受けたい授業』といえば堺 正章さん、くりぃむしちゅーさんの番組で、当日は他にも水卜麻美さん、安田 顕さん、佐藤栞里さん、お笑いの錦鯉さんなどが出演されるとのこと。「え？え？そんな有名人の方達と私がスタジオでやり合うの?!」 あまりに大それた話だったのでよっぽど断ろうかと思いましたが、家内や知人が「さすがに断ったら勿体ない」と言うので思い切って出演することに。出演依頼が11月３日、東京・汐留での収録が11月11日、放送が11月18日という急転直下の出来事です。

収録までの１週間は正直生きた心地がしませんでした。まさに夢でもみているような気分で、そのうち目が覚めるのか？とか本気で思っていましたが、一向に目は覚めないのでした。敢えて何も考えずに仕事にだけ集中して過ごし、収録日の代診を急遽依頼したりしながら、いよいよ本番当日。生まれて初めてメイクなんかされたりして、気づけば周りは芸能人だらけ、緊張していて何をしゃべったかよく記憶がない状態でしたが、なんとか収録は無事終了。出演者の中に大のビートルズファンの水卜さん、安田さん、有田さんがいらっしゃったので、番組もなかなかの盛り上がりでした。限られた人にしか出演については明かしていませんでしたが、さすがに全国放送の威力はすごく、放送後あらゆる方から「見ましたよ！」といっていただけました（ビートルズは放送権が非常に厳格で放送は一回きり、TVer や Hulu での配信もなしですのでご了承ください）。

番組収録後に水卜さん、安田さん、有田さんと４人でしばしビートルズ談義というとんでもない非日常的体験もできましたし、サイン・記念撮影などにも応じていただき、皆さん本当に良い方ばかりでした。そのときの写真などお見せしたいところですが、さすがに権利上難しいのでサイン（ビートルズのホワイトアルバムにサインしてもらいました）を載せておきます（下の**写真**）。水卜ちゃんのサインがなんとも素朴でかわいいのと（有田さんにツッコまれてました）、それを真似した藤本さんのサインがまたオツでしょう？

それにしても、１つのことに徹底して打ち込んでいると、全く想像もしていなかったような展開もあるのだとしみじみ感じた出来事なのでありました。こんな貴重な体験ができて、やっぱりビートルズってすごいなぁ・・・この趣味、まだまだやめられそうにありません。たぶん一生やってるんでしょうけどね（笑）。